

2. 地域資源を活かした魅力ある地域づくりの構築を目指して

松本市地域づくりインターン第1期生・鎌田地区担当 塚原 有香

1. はじめに

近年、地域づくりに関わる活動は多くの自治体や企業、団体で取り組まれている。地域おこし協力隊や地域づくりネットワーク、地域づくり協議会など様々な主体によって行われている。これだけ多くの“地域づくり”という名前を使った団体や事業、システムがあるが、地域づくりの定義は明確に統一されていない。そのため、各自治体や団体、機関が様々な定義を掲げているのである。地域産業の振興や福祉事業の促進、都市計画や地域行事、イベントなどを意識したものなど、その範囲はとても広い。これは、日本の社会的な課題や問題が多様であるため、地域づくりの目的や手法が異なるのではないだろう。

では、今の日本にはどういった問題や課題があるのだろうか。調べてみると数多くの社会的課題や問題がある。地球温暖化や高齢化人口減少、介護問題といったものから、ワークライフバランス、伝統文化の継承、人権問題など多種多様である。そういった社会的な課題や問題の解決のひとつとして行われているのが、“地域づくり”なのだ。これらの社会問題を“地域づくり”を通してどうしていくか、どうやって解決あるいは改善していくかが重要である。

そんな中、松本市では“地域づくり”をこのように述べている。“地域づくりとは、「安心して、いきいきと暮らせる住みよい地域社会を構築するため、住民が主体となって地域課題を解決していく活動や取り組み」¹⁾としており、住民自治、地域の教育力、地域連携といった「地域力」の向上が、松本市の将来の都市像である『健康寿命延伸都市・松本』の土台をつくるとされている。その1つとして平成27年度から始まった「地域づくりインターンシップ戦略事業」は、地方創生プログラムの先行事業として位置づけられており、地域づくりの現場での活動を通じて、若者の地域参加による地域の活性化や地域づくりに貢献できるスキルを身につけた若者を育成するものである。また、地域での活動と並

行して、定期的に大学で地方創生や地域に関わる様々な課題やより掘り下げられた調査、研究を進めている。この地域づくりインターンシップ戦略事業は本年度で2年目となった。

これまでの活動を振り返るとともに、地域づくりについて再考していきたいと考える。

1-1 研究の背景

地域には様々な課題を抱えている。高齢化や人口減少、伝統文化・行事の継承問題、子育て支援などの問題は地区や市町村関係なく程度の違いはあるが、どの地域でも挙げられる問題だろう。特に少子高齢化は地域にとってとても大きな課題となっている。

国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、平成27(2015)年の日本の総人口が126,597,000人であることに對し、平成52(2040)年には約107,276,000人と推計され、2千万人近くの人口が減少すると見込まれている。65歳以上が占める割合は26.8%から36.1%まで上昇している。また、長野県では平成52年には40万人以上の人口が減少すると推測されており、高齢化率は8.5%増えて38.4%まで上がっている。

このような地域の少子高齢化の問題に対して、松本市でも少子化対策事業や定住化促進事業、地域文化伝承の人材育成の推進などの事業や取り組みを行いながら、行政と地域住民とが共に地域づくりを進めている。

私の担当地区である鎌田地区の高齢化率は21.4%と松本市の高齢化率(27.1%)より低い傾向にあり、人口も増加傾向にある。一見すると何の課題も無いかのように思えるが、鎌田地区の中の町会ごとの高齢化率を比較すると大きな差がある。そのため、鎌田地区の中でも町会によっては、町会の役員等の担い手不足や高齢者の交通手段の問題、行政区画としての鎌田地区としての所属意識などの課題を抱えている。このように地域の問題が、多様化・多角化していく中でこそ、地域住民が主体となって持続可能な地域づくりを考えていく必要が

あるといえよう。

1-2 研究目的

地域住民が主体となった持続可能な地域づくりを行うためには、地域住民自身が自らの地域の魅力を知ることを通して地域愛を育てていくことが必要である。しかしながら、地域住民は、自らがその地域に住んでいるが故に、自らの足元の地域の魅力を意識化することは少ないのではないだろうか。地域住民が主体となった地域づくりを進めていくためには、住民自身が地域の魅力に気づかなければ、地域の発展は望めないだろう。

そこで昨年度において、地域資源を発掘し、地域の魅力を地域づくりに活用することを目的として、「お宝発掘事業」と題した企画を計画・実施した。これは、地域住民が地元の魅力を知るために、身近な地域の文化や伝統行事、人材など様々なものを「地域の宝」として捉え直し、それらを同じ地域住民に向けて発表するという試みである。

そうした活動を通して、地域資源を住民自らが発見し、それらに価値を見出していくことから、地域独自の文化や歴史の継承、住民主体の地域活動の発展へとつなげていくことはできないかと考えた。

そこで、本研究においては、どのように活かされていない地域資源を掘り起こし、それらの持つ価値を再評価しなおすことを通して、地域資源を活かした魅力ある地域づくりへと発展をさせていくことができるかということについて考えることとしたい。

1-3 問題提起

では、地域資源とは、そもそも何を指しているのだろうか。地域資源には厳密な定義はなされていないが、文部科学省では地域資源の特徴として、次のように挙げている。

「地域資源」についての固まった厳密な定義はないが、その特徴としては次のとおり。

- ①非移転性(地域性): 地域的存在であり、空間的に移転が困難
- ②有機的連鎖性: 地域内の諸地域資源と相互に有機的に連鎖
- ③非市場性: 非移転性という性格から、どこでも供給できるものではなく、非市場的な性格を有するもの

こうした特徴からみて、地域資源は大量生産・大量消費型の資源とはなり得ず、まさに新しいパラダイムの下で積極的に活用されていくべき資源。

また、これらの特徴は、その存在そのものが既に他とは差異化された独自の価値を有することを含意。

資料1 文部科学省「地域資源の活用を通じたゆたかなくづくりについて」より抜粋

この資料からわかるように、特定の地域に存在する特徴的なものを資源として捉えており、尚且つ活用可能なものであるとしている。そのため、従来の資源の捉え方として中心的であった大量生産・大量消費型の資源とは異なり、他とは差異化された独自の価値を有するものを地域資源として捉えている。新しい枠組みの中で活用されていく資源であり、ローカル性を持ち、地域の中に存在する様々なものごとが対象となる捉え方であるといえよう。つまり、自然資源や産業資源だけではなく、人的なものや文化的なものなども含まれるといえるだろう。

このように、地域資源はその名の通り、地域に根ざしたものであり、人や自然、文化など様々なものが地域資源となりえる。そういった資源を地域の中で見つけ、活用していくことも地域づくりに繋がっていくのではないだろうか。

しかしながら、これまでの地域づくりは、どちらかという新しい施設や事業を立ち上げることに重きを置いているように思われる。新しいものや建造物、最新システムの機器には確かに、便利で利用しやすいかもしれない。それでは、地域住民の愛着やその土地ならではのものを蔑ろになってしまい、地域住民自らが地域資源に気づく機会も失ってしまうのではないだろうか。

そこで本論文では、新たなものを立ち上げるのではなく、古くから地域にある文化財や自然、人やものの中から地域住民が地域資源を発見していくためにはどうすれば良いのかを考えていくこととする。そして、取り組みを通して地域資源を活用した地域づくりのあり方について検討していきたい。

2. 研究方法・研究

本章では、地域づくりインターンとして活動した実践事例を通して、地域資源を活かした魅力ある地域づくりの構築を目指すために、どのように地域資源を発掘、活用していくか研究調査を行った。そして、地域資源を活用した地域づくりのあり方について考えていくこととしたい。

2-1 実施事例

昨年度は、地域づくりインターンとして町会連合会会議や福祉ひろば事業の参加、地区事業など多様な活動を行った。その中で、地域資源にスポットを当てた事業でもある「お宝発掘事業」「まちなかギャラリー事業」の活動に焦点を当てながら、本年度の実践事例を紹介していくこととする。

2-2 お宝発掘事業

鎌田地区の魅力を見直す事業として、昨年に引き続きお宝発掘事業を行った。この事業は、地域の魅力=お宝という考えのもと、地区内にあるお宝を発掘するための事業である。本年度は「鎌田地区 お宝展示会」として鎌田地区文化祭と同時開催をした。今回は、事前調査を行ってより詳しく出品されたお宝の情報を収集し、一部の人だけではなく、より多くの地域住民に発信できるように発表形式を変更した。また、募集するお宝の範囲に関してはモノだけではなく、行事や自然環境もお宝として出品できるようにし、より多くのお宝を出品してもらえようとした。概要や当日の様子は以下の通りである。

(1) 概要

①目的

鎌田地区の新たなお宝を見つけ出し、地域の魅力を再発見するためのものである。昨年度に引き続き、町会にある様々なお宝(地域資源)を集め、地元の魅力をより多くの住民に知ってもらおうこと、そしてその地域にあるお宝を活かした地域づくりを考えていく。

②運営主体

鎌田地区公民館、鎌田地区町会連合会

③日時

平成28年10月22日・23日(土・日)

※鎌田地区公民館文化祭に合わせて展示

④場所

鎌田地区公民館

⑤募集するお宝について

・町会にあるお宝

町会の中でお宝だと思うもの、まだ広く紹介されていない文化財や建物(個人の所有物でも可)

例：土蔵や稲荷、掛け軸、骨とう品、写真など

・町会にいるお宝人

町会として守っていきたい人や大切にしていきたい人、紹介したい人

例：そば打ち名人やマジックの達人、奉仕活動を長年続けている人 など

・自慢の風景、催し

町会の中にある自慢の風景・穴場スポット、町会独自で開催しているイベントや季節の催しを写真や記事で紹介

例：湧水や田園風景、庭園、時季の催しなど

⑥企画の流れ

・2回目となる今回は、「鎌田地区お宝展示コーナー」と題して文化祭にて展示を行う。

・持ってくるできないお宝は写真撮影をし、展示(A4判)をする。

・展示では、お宝の説明文を付けて分かりやすい展示に努める。

記入する内容【①お宝名 ②出品者名 ③お宝について(年代・場所など詳しい説明)】

⑦その他

・分野を問わず、町会で1つ出品していただく。

・出品の決め方については各町会にお任せする。(予選会、推薦、指名等)

・今回はより多くの方に知ってもらうために鎌田地区文化祭と合わせて、発表ではなく展示形式とした。

(2) 事業実施計画

7月 企画考案

8月 企画書作成、打ち合わせ

9月 企画書及び説明書を町会長会議へ提出及び出品依頼

会場調整、出品に関する打ち合わせ

10月 出品締め切り、お宝撮影・資料作成

お宝搬入、展示準備

鎌田地区お宝展示会「鎌田地区お宝展示コーナー」開催

(3) 当日の様子

当日は公民館のロビーを中心に展示コーナーを設けた。文化祭と同時開催ということもあり、子ども

もからお年寄りまで幅広い世代の方が見に来ていた。自身の町会はもちろんのこと、他町会のお宝もゆっくりと見る方が多くいた。出品されたお宝は、町会の住民も始めて見る、知るであろうものもあったようで、時折質問などを行っている方も見受けられた。今年度はもっとも大きなお宝として、お神輿が出展された。これは地区住民でもあることを知らなかった方が多くいたようで、とても注目を集めた。出品してくれた町会では、今回のお宝発掘事業を機に、町会内のお宝となりうるもの（地域資源）を探したようである。事業を通して町会＝地元の魅力を探すという意識が生まれたことは大きな成果である。



写真1 当日の様子



写真2 お宝について話し合う

また、展示をするにあたり、事前に出品されるお宝に関する情報を集め、キャプションを作成した。これは、ただお宝を見るだけではなく、なぜお宝として出品されたのか、歴史や背景などを知ってもらいより身近に感じてもらいたいという思いから作成したものである。このキャプションの効果もあり、見に来てくれた方の滞在時間が長くなったのではないだろうか。

今回のお宝発掘事業では、展示という形式を

とったため、前回とはまた異なったお宝が集まった。町会によってはたくさんの写真やお宝を持ってきてくださる方もいたが、展示スペースの関係で減らしてしまったことは残念である。しかしながら、前回は発表会という形式だったため特定の人や限られた人にしか披露できなかったが、今回は展示形式ということもあってより多くの地域住民に知ってもらうことができた。

前回の課題として多くの町会が出品してくれるように募集範囲を広げたり、展示形式をとって出品者の負担を減らしたりするなどの改善をしたが、それでも出品をしてもらえなかったところがあるのも事実である。町会の雰囲気や役員の方の考えなどもあるだろうが、私自身の知識不足なことや、積極的な呼びかけが足りなかったことは反省点である。しかしながら、出品できなくとも一生懸命に探してくれた町会があることも事実である。町会のお宝を出品する前に、どのように探してもらうか、どういったものがお宝となりうるのかといったこともサポートできるようにしていくための仕組みや講座なども今後検討していきたい。

2-3 まちなかギャラリー事業

中央地区で活動している地域づくりインターンの濱さんとの共催事業として上土商店街を中心にまちなかギャラリーを企画した。この企画は平成26年に白戸ゼミの上土日和で行った「大正浪漫ギャラリー」を基に計画を進めたものであり、松本大学の学生と共に企画、運営をした。概要や当日の様子は以下の通りである。

(1) 概要

①目的

城下町である中央地区の中に江戸～昭和のものを飾り、当時の松本の情景や時代背景を歩くことによって感じてもらうための企画である。

街の中に様々な展示品を置くことにより、より多くの方にまちなかを歩いてもらい、松本の新たな町並みを知る機会の創出や回遊ルートを作り上げるきっかけにして、本年度は旧松本電気館の活用したまちづくりを1つのテーマとし、上土商店街を始めとする周辺の展示を進めていく。

②運営主体

地域づくりインターン 松本大学

③開催期間及び場所

10月16日(日) 中央地区ふれあい祭り【大手公民館】

11月19日(土)～まちなかギャラリー【上土商店街を中心とする中央地区】

④募集作品及び方法

中央地区の住民の方へ向けて、展示品の募集を行った。募集方法としては、ポスターやチラシを作成し、回覧等での周知や、商店街へは日頃から関わりを持っている学生たちが直接訪問し、企画の趣旨説明を行い募った。主な募集した作品項目は以下の4点である。

- ・江戸～昭和のもの
江戸～昭和時代に使われていたと思われるもの ※持ち運び可能なもの。
例：食器など生活用品、手紙などの文章、着物、ランプなど
 - ・当時の写真
昭和以前に撮られた写真や松本市内を写した写真、新聞記事など
例：家族写真や風景写真、新聞記事などに載っている写真など
 - ・映画館に関わるもの
大正～昭和にかけてある映画のポスターや看板、チケットなど
映画館に関わる文献やチラシ、写真など
 - ・松本の伝統工芸
松本の民芸品や工芸品
例：松本家具、松本てまり、松本押絵雛、みずびと細工など
- これら4つの項目で集めた作品に加え、「大正浪漫ギャラリー」開催時に収集・保管していた作品を整理し、一部を展示した。

⑥展示内容

様々なテーマを設けて、街全体をギャラリーとして位置づけをした。尚、展示品の説明(キャプション)は若者目線で、その時代の生活用品や写真について説明文を感想や意見を交え、学生に書いてもらった。

- ・生活用品
江戸～昭和まで使われていた用品や写真、嗜好品などを通して歴史を知る。
- ・映画に関わる品
映画のポスターやチラシを展示することで当時の场景を知り、旧松本電器館の保存や活用に繋げる。
- ・ファッション

時代の変遷がよく分かる洋服を通して、当時の流行を見て楽しむ。

⑦展示イメージ

展示場所に関しては、店舗の軒先やショーウィンドウなど、外から気軽に見ることができる所に展示。また、ギャラリーマップを作成して動線を明確化し、回遊性を高める工夫をした。

(2) 事業実施計画

- 6月 企画考案、企画書作成
- 7月 松本大学学生と話し合い及び顔合わせ
中央地区町会連合会会議に出席し、事業の趣旨説明
- 8月 日程調整、随時打ち合わせ
- 9月 合同ゼミナールにて日本大学学生と展示品の仕分けや募集依頼
- 10月 展示について博物館学芸員の一之瀬氏より講義
中央地区ふれあい祭りにてまちなかギャラリーの展示(1日限り)
街中の展示準備、展示品のリスト化
- 11月 まちなかギャラリー準備(展示作業)
まちなかギャラリー開催

(3) 事前準備の様子

今回の事業では趣旨説明や話し合いや打ち合わせを行い、中央地区の町会連合会や大手公民館の方々にもご協力いただきながら進めてきた。特に展示品の募集に関しては中央地区の方々の協力がなければギャラリーの開催自体が危ぶまれていただろう。また、ゼミ活動を通して地域住民と関わりがある学生たちから商店街の方々へ直接、展示依頼や作品の募集を行い、多くの協力を得ることができた。このように様々な方の協力のものと、準備を進めてきた。

特に、苦勞をした作業は展示品の仕分けである。これに関しては、毎年行われている合同ゼミナールでも行ったため、松本大学の学生だけではなく、日本大学の学生にも協力をしてもらった。この作業では、今回募集した作品と保管していた作品の両方をまとめて分類してリスト化(データ化)をした。この分類コード及びリストは松本大学の向井先生が作成してくれたものを基に学生と共に作業を行った。始めに、ビニールシートを敷いたところに集まった作品を全て並べ、全員手袋をして直接手では触れないようにして行った。作品は雑誌などの書籍が多く、次いで時計や食器といった生活用品が多かった。特に書籍に関しては、10の大区分に分類し、さ

らに、細分化してより細かな分類にした。一つ一つ中身や出版元を確認しながら作業をしたため、多くの時間を費やした。これら仕分けをした作品は、食器や時計といったものは名札とともに袋に入れ、書籍はリスト順に並べて、番号をふった段ボール箱へ保存をした。

この作業を行うことによって作品を適切に管理し、データ化することで作品の情報を取り出さずに確認できるようになったことは大きな成果である。



写真3 書籍の分類作業



写真4 生活用品の分類作業

また、本企画では数多くの古いものや価値のあるものを扱うため、専門家として松本市役所の市ノ瀬学芸員に来ていただき、展示品の管理や扱い方、展示方法などを細かく教わった。特に展示品の管理については、素材（木製・金属など）によって温度や湿度、ものによっては紫外線や蛍光灯の灯りにも気を配らなければならないことを学んだ。展示方法については、ひとつの展示スペースの中で統一性のあるものにすることがよいということも学んだ。統一性といっても、展示品の素材や時代、用途など様々な分け方があり、展示をした背景や物語を伝えることも必要である。例えば、鳶口を展示するなら『まちの治安』と題して現在の法被や消防関係の資料や写真と共に並べると統一性もあり、展示品をより深く知ることができる。こういったアイデアや配慮が大切なのだ。このほかにもキャプションの作成や写真の展示方法など展示に関わる技術や知

識を教えていただき、これら学んだことを活かしながら展示作業へとつなげていった。

これらを通して、当日展示までに各店舗の展示担当を決め、展示テーマの決定及び展示品の選定、キャプションの作成を行い展示当日まで作業を進めていった。そして平行してまちなかギャラリーマップやポスターチラシなども作成し、より多くの方に来ていただけるような仕組みづくりに努めた。



写真5 展示の勉強会

(4) 当日準備・展示の様子

当日準備では、学生と共に展示作業を行った。展示に関わる看板やキャプションなども作成し、集まった作品と共に公民館、各店舗へ伺い展示を行った。作品を並べるということは予想以上に気を遣う作業であり、向きや角度などそれぞれの作品によって置き方や見せ方が異なるので苦勞をした。また商店街での展示作業は外から見る展示のため、店舗の中から展示をして外に出て確認をするといった動作を何度も行って、向きや光の加減などを見ながら展示作業を進めていった。商店街の方たちも展示作業をしていると、声を掛けてくれたり、展示のアドバイスをくれたり展示方法を考えてくれたりと気に掛けてくれ、まち全体でギャラリーを作り上げていく雰囲気となっていた。



写真6 展示品等の搬入



写真7 展示作業風景

開催は主に2回に分けて行った。まず1回目としては、中央地区ふれあい祭りにて開催をした。このお祭りは大手公民館で行われており、当日は中央地区の方や地域住民の方が多く来場されとても賑わいを見せた。人によっては何度も来られたり、ルーペやメガネを持ってきてゆっくりと一つひとつの展示品を見ていたりする方など様々であった。特に興味関心が多かったものは、写真関係だった。大正、昭和初期の写真をいくつか展示しており、それらの写真を通して当時の思い出や城下町の変遷などを数人で語られる方が多く、その話を熱心に聞いている方もいた。私も展示説明としていたが、私が説明をするよりもよく知っている方が多く、反対に教えてもらうことが多くあり勉強になった。

2回目は、えびす講・しょうふく祭開催日と合わせて開催をした。展示ブースは全て赤い布で統一し、一体感を持たせ、各店舗に沿った作品やテーマで展示をした。「まちなかギャラリー」は上記でも説明をしたように、街中を歩くことがねらいであったが、開催当日は雨天であったこともあり、出歩く方が少なかった。しかし、継続して展示をしているため、その後、観光客が足を止めて見ている様子や写真を撮っている姿も見受けられた。

2回に分けて行った「まちなかギャラリー」では、予想以上に多くの方が昔のものを通して地域の歴史や変遷に興味関心を持ってきていたことが分かった。多くの方が、展示品について質問をしたり、興味をもって話をしてくれたりしたことは、それだけ歴史や地域の変遷、文化に興味が出ていたからこそであろう。また、高齢の方たちが自身の知識や記憶を思い返しながらか話をしていることは、当時の出来事やその時代を知らない人たちに思いを伝えなかったからこそではないだろうか。そして、このギャ

ラリーを通してまちを知るきっかけ、思い出すきっかけとなったのではないだろうか。

このように昔からこの地に住み続けている方たちの話すものは、私たちが松本市の歴史や変遷を調べても、それは資料や写真、人づてのものがほとんどで、当時生活していた人たちの話す内容にはとても敵わないということを痛感した。そういった人々の主体性を引き出すとともに、今後の「まちなかギャラリー」へどうつなげていくか、後押ししていくかといったことが、地域づくりを考える上で必要な力になってくるのではないかと強く感じた。

また、「まちなかギャラリー」を通して、地域の歴史や時代の変化、変遷に触れてその知識をもってまた街中を歩くことによってただの通り道が違って見えてくる。こういった発見や学びを地域住民はもちろんのこと、松本を訪れる方にも気軽に見ることができる・学ぶことができる空間をつくるのが地域づくりにもつながっていくのではないだろうか。

2-4 活動を通して

これらの活動に取り組むことを通して、地域資源の発掘や魅力を再発見することができた。また、地域住民との関わりの中から、住民目線の地域資源や地区の魅力、思いを知り、そこから地域づくりについて改めて考えることができた。

一方で、地域資源の発掘や住民の意識を変えていくことの難しさも身を持って知ることができた。実践事例でも地域住民の負担にならないように計画や募集を行ってきたが、なかなか理解を得ることが難しいときもあった。今回の事業は、インターンや学生からの企画提案によってはじめられたものであり、今後、地域住民にどう関わってもらいながら事業を進めていくかを検討していかなければならない。これは、住民主体の地域づくりを考える上でも必要なことだろう。地域の中にはリーダーとなって活動を進めていく人が必ずいる。そういった人材を見つけ出すと共に、どのようにサポートしていくか、また後押しできるかも大切である。これらの反省を活かして今後も活動を続けていきたい。

3. 考察

このような実践事例を通して、より多くの人に地域資源を知ってもらうためにはどのような仕組みづくりやアプローチをしていけばよいのかを考えたときに、博物館=ミュージアムと地域資源を一体に考

えた仕組みづくりをすることによって地域資源が活用され、地域住民のみならず幅広い世代が知り、学べるのではないかと考える。

3-1 エコミュージアムと地域資源

地域資源とミュージアムの関わりを考えていく中で、エコミュージアムは切り離せないものである。エコミュージアムとは文部科学省でこのように述べられている。

エコミュージアムとは「ある一定の文化圏を構成する地域の人の生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義づけられている。

資料2 文部科学省「エコミュージアムについて」より抜粋

このエコミュージアムの考え方は、松本市のまるごと博物館構想でも取り入れられている。松本市まるごと博物館は、市全域を活動範囲として展開を図っており、博物館の役割を重視しながらも市民の活動、研究の拠点となると共に、自然環境や文化、産業等の遺産の活用を通して地域振興に寄与することを進めているとされている。²⁾

そのため、市内の博物館や美術館はもちろんのこと、重要文化財や記念館もこのまるごと博物館構想に含まれている。このように文化財と博物館、美術館をまとめて博物館として考えていく構想を地区内でも活用していけるのではないだろうか。

このようにエコミュージアムとは、特別な文化や収集品のみを扱い、学芸員という専門家の管理のもとで展示・保存されている従来の博物館の特徴とは異なり、展示資料の現地保存、住民が参加して運営などを通して地域を見直し、その発展に寄与することが特徴である。この定義や特徴は、地域に根ざしたものであることや地域社会の発展に寄与することが目的とされているところは地域資源の特徴と通じるものがある。そうしたエコミュージアム的な発想を学ぶことによって、地域住民が地域の宝となりうる地域資源を探したり、活用について考えたりすることによって、そこから住民主体の地域づくりの構築ができる可能性を見出せるのではないか。

例えば、鎌田地区内に点在している文化財（神社

仏閣、道祖神などを含む)を集約して、活用を考えると同時にまとめることによって保存や保全をすることができる。また、地区には歴史マップというものが、地区内に点在している歴史遺産が写真や地図でまとめられている。今後はこの地図をどう活用していくかも考えていく必要があるだろう。もちろん、管理のためだけに集約するのではなく、活用することでさらに魅力や知名度が高まり、守っていこうという意識も生まれるのではないだろうかと考える。

3-2 みんなのミュージアム

また、ミュージアムを博物館だけではなく、幅広い住民の交流の場所と捉え、図書館やコミュニティカフェなどにも範囲を広げるとともに地域資源の活用ができればより多くの人に関われるのではないだろうか。塚原正彦著『みんなのミュージアム 博物館図書館未来学』ではこのようにいわれている。

「みんなのミュージアム」は、一人の人の人生に影響を与える「知と学び」を育むこと目指している。(省略)「みんなのミュージアム」は、「ふるさとの宝物」(=ミュージアム)、「想像力を育む本棚」(=ライブラリー)、「人と人を結ぶカフェ」(=交流)の3つの装置で構成される。「ふるさとの宝物」に出あうことで、私たちが生きていくために欠かせないモノやコトの価値は再発見される。

「想像力を育む本棚」に出あうことで、私たちの想像力は磨き上げられるだろう。「創造力を育む本棚」と「ふるさとの宝物」がリンクすることで、日常と非日常、過去と未来が縦横に結びつくことになるだろう。そして、これまでは思いもつかなかったような暮らしにかかわるモノやコトが縁結びされるはずである。

それに加えて、「人と人を結ぶカフェ」に参加することで、誰とでも気軽に交流することができるようになり、食やファッション、インテリア、子育て、近所の助けあいなどにかかわる「学びの成果」が持ち寄られ、共有されることになるだろう。

資料3 塚原正彦著『みんなのミュージアム 博物館図書館未来学』より抜粋

「みんなのミュージアム」では、ミュージアムはふるさとの宝を知り、再発見するためのものとして捉えられ、ライブラリーを通してその宝の歴史や情景

を学び、より理解を深めることができる。そして、交流をすることによって学びの成果を共有し、誰とでも気軽に関わりをもつことができるものとされている。このようにふるさとの宝を通して知る・学ぶ・伝える（共有）するという一連の流れが構築されていることによって、ふるさとに対する意識や考え方の変化が生まれ、そこから地域住民主体の地域づくりの構築の可能性を見出していくことができるだろう。

このような手法をお宝発掘事業でも取り入れることにより、ただ知るだけではなくそこから学びや交流へつなげていけるような流れを構築していく必要があると考える。また、地区内には文書館があるため、地区の歴史や変遷、文書資料を通して過去・現在の松本市を知ることができる。そういった地区にある施設を活用しながら活動につなげていきたい。

4. まとめ・展望

本年度においては、地域資源に視点をのこした活動を行ったが、活用や学びという機会や空間を形成するまでは至らず、イベント的に終わってしまったことが課題である。しかし、昨年度に引き続きお宝発掘事業を行うことによって、地域住民が「地域のお宝を探そう」、「地元の魅力を見つけよう」という意識付けを持ってもらえるようになってきた。しかしながら、これらの意識付けは全域的ではない。今後は、地域資源とは何であるのか、魅力となりえる宝をどう探していけばよいのかを講座や勉強会などを通して取り組んでいく必要がある。そして、そういった学びを通して地域の魅力に気づくとともに地元愛を育てていけるだろう。その地元愛や地域の魅力を発信する手段のひとつとしてお宝発掘事業やまちなかギャラリーへとつなげられるようにしたい。

また、本年度は実現をすることができなかったが、鎌田地区の古文書史料を収集・活用して、地域の歴史や変遷について地域住民と共に学べるような機会を作ること考えている。前項でも触れたが、松本市には松本市文書館が存在する。文書館では「松本市史」の編さん事業において収集された資料や、旧役場文書、旧公函などの文書資料のほかにも歴史資料や映像など多数が保存されている。このような施設も地域資源のひとつといえるだろう。既存の施設や文化財、自然や風土など地域に根ざ

したものを地域づくりの核として活用していくことによって、地元の魅力溢れるまちとなっていこうと考える。

地域に根ざし、人や自然、文化など様々なものが地域資源として見出され、地域づくりに活かされる。一見すると簡単なことのように思えるが、実際、身近にある魅力に気付くことは極めて難しい。例えば、地元住民が何気なく食べているものや見ている風景でも観光客には人気があったり、喜ばれたりすることもある。何気なく過ごしている日々の中でも地域の魅力はあるのだ。その魅力や価値に気付けるか、気付けないかで地域づくりは大きく変わるのでないだろうか。その魅力や価値に地元住民が気付くことができたなら、それは地域資源として大切にされ、地域に根差した魅力的な地域づくりへと活かされていこう。

注

- 1) 松本市ホームページ 地域づくり：地域づくりとはより
- 2) 松本市ホームページ 松本まるごと博物館構想：第4章より

参考文献

- ・文部科学省「地域資源の活用を通じたゆたかなくにつくりについて」p.7
- ・文部科学省「エコミュージアムについて」
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm
- ・塚原正彦著『みんなのミュージアム 博物館図書館未来学』（株式会社地域社会研究所 2016年）p.174-176
- ・農山漁村文化協会「地域から変わる日本 地元学とは何か」（社団法人 農山漁村文化協会 2001年）

資料一覧

(1)お宝発掘事業

写真資料



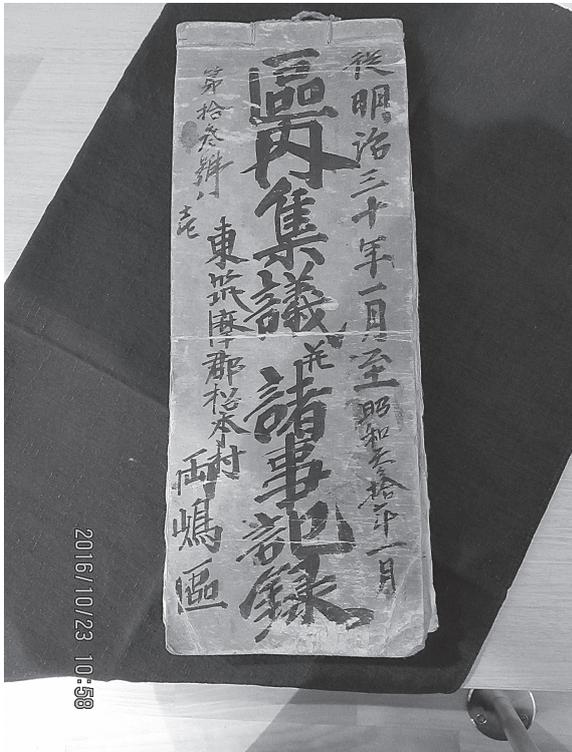
展示コーナーの様子



当日の様子



お宝「お神輿」



お宝「古文書」

キャプション（一部）

お神輿

町会名 石芝東町会

昭和51年町会に太宰府天満宮勧請の「石芝天満宮」が創建され、夏祭りとして祭典を行うようになりました。その後、祭典を更に盛り上げた内容にの思いから、昭和54年7月吉日、当時の総代長（萩窪町会長）がお神輿を寄贈され、現在でも老若男女皆が祭典に参加、親睦と和を深めると共に氏神様によって町会の繁栄と発展を願うものとなっております。今回はその祭典用のお神輿を出品します。

作品

- ・お神輿【出品：石芝天満宮】
- ・写真展示

笹部小唄

町会名 笹部町会

年代や作曲者は不明ですが、地元では古くから踊り継がれてきた唄です。三味線や尺八などの演奏に合わせ数十人が数列の横隊になって行進しながら踊ります。現在では、笹部町会の盆踊りや運動会で踊られており、「笹部小唄保存会」によって歌い踊り継がれています。

作品

- ・笹部小唄写真 2点
- ・歌詞

井川城下区町会航空写真

町会名 井川城下区町会

戦後間もない昭和23年11月22日に撮影された地図です。この航空写真には井川城全体が写っています。当時は田や畑が広がり、閑静な田舎だったと想像できます。現在、この地域は住宅が立ち並び風景は変わってしまいましたが、昔を懐かしく思い出していただけたいと思います。

作品

- ・昭和23年に撮影された航空写真

日本百名山を寄り添い完登

小倉 ご夫妻

町会名 南原町会

平成9年から仕事の合間を縫って全国各地に足を運び、深田久弥氏が選定した100座の山【日本百名山】を18年をかけて全て完登されるという偉業を達成されました。今回は小倉ご夫妻が登り、撮影した日本百名山の山々の写真をいくつか展示します。

作品

- ・日本百名山の写真 5点
- 【出品：小倉氏】

(2) まちなかギャラリー資料

写真資料



展示準備の様子



ショーウィンドウ展示



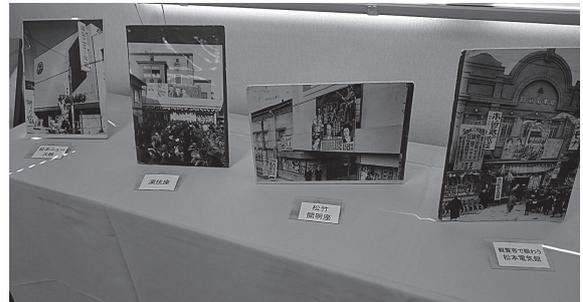
展示作業の様子



カフェあげつち内の展示



中央地区ふれあい祭り展示



昔の写真展示

展示のために

江戸～昭和40年頃までの生活用品や
写真・伝統工芸品を探しています。

第一締切：8月31日(水)
第二締切：9月30日(金)

締切日は上記の日程より随時募集いたします。
下町会館カフェあげつちまでご持参下さい。
ご協力をお願いします。

ご提供頂ける方等のお問い合わせ・質問等は
→下町会館カフェあげつち(電話：0263-32-2007)まで

松本大学 向井・白戸ゼミ

まちなかギャラリーポスター